

## 2021年度(令和3年度)人間科学部卒業研究優秀賞の報告書要旨を掲載するにあたって

2019年度(令和元年度)から4年次の卒業研究は、専門ゼミナールから独立した2単位と位置づけられ、主査と副査の審査に基づく総合点によって評価されることとなりました。

更に、両学科においては、それぞれの専門性を元に独自に設けた「該当者なしも厭わず」の強い姿勢で臨む審査基準および審査方法によって、こども学科では優秀賞1名、スポーツ学科では最優秀賞1名が下記のごとく、厳正に選定されました。

両者とも先行研究の文献調査による知見を踏まえ、幼保園児の具体的な行動を観察調査、あるいは大学硬式野球部選手の運動能力測定などの実験によってエビデンスを求めた堅実な研究である、と高く評価されました。

2名の報告書要旨が、これから卒業研究に取り組む後進の道標になることを期待します。

### □こども学科

優秀賞 318526 竹田うらら 【幼保系】 保育におけるごっこ遊びの役割について—物の見立てに着目して—
--

### □スポーツ学科

最優秀賞 318002 阿部大樹 【コーチング分野】 大学野球選手におけるハムストリングスの肉離れの要因の検討
--

2022年9月22日

卒業研究委員会代表 学部紀要編集委員長 馬場 治

## 保育におけるごっこ遊びの役割について

### —物の見立てに着目して—

318526 竹田うらら

指導教員 直江学美

#### 1 研究の目的（研究テーマの選定理由と研究対象）

筆者は、幼児期から小学校の低学年まで、様々なごっこ遊びをして過ごした。大学では、実習や保育園でのアルバイトを通して、ごっこ遊びを楽しむ子どもの姿を多く目にし、子どもとごっこ遊びの関係について考えるようになった。ごっこ遊びは保育においても、重要であると考えられる。筆者がこれまで訪れたことのある幼稚園やこども園には、必ず食べ物や調理器具の玩具が置かれており、なかにはおままごとコーナーのある園もあった。そのため、本研究では、保育においてごっこ遊びがどのような役割を担うのかについて考察する。

また、ごっこ遊びについて考える中で、筆者は特に「物の見立て」に興味を持ち、1つの玩具でも子ども一人ひとりによって様々なものに変化することに面白さを感じた。そこで、子どもの物の見立てに影響しているものが、現実の世界で体験したことであるのか、あるいはテレビや絵本などの、仮想の世界のものであるのかについても明らかにしたい。

#### 2 研究の方法

第1章・第2章では、辞典や幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(2018)、または先行研究などを用いて、文献調査を行い、保育におけるごっこ遊びの役割について考察した。

第3章では、筆者が保育補助のアルバイトをしているA保育園で、物の見立てにおける観察調査を行った。この調査では、筆者も保育に参加し、ごっこ遊びが見られたら、子どもが見立てているものを写真に撮り、子どもの様子を簡単にメモに取り、それらをもとに記録した。

#### 3 研究の結果

第1章では、幼保連携認定こども園教育・保育要領解説(2018)から、5領域の中でごっこ遊びについて示されているのは、主に「人間関係」「言葉」「表現」であることが分かった。また、ごっこ遊びは、模倣行為から始まり、徐々に他者との関わりが増え、5歳児では、テーマや役割を決めて遊ぶ協同遊びへと、変化していく。この過程で子どもは、他者のイメージを受け入れることを通して、他者との関わり方を学んでいくのではないかと考える。

3, 4, 5歳児を対象とした、物の見立てにおける観察調査では、主に男女の違いを感じた。女兒は、現実の世界をイメージしていると思われるもの場面が多く、日常生活の影響が大きい傾向が見られた。一方で男児は、仮想のキャラクターに見立てている場面や、現実の世界にはないものを、イメージしていると思われる場面が多かったことから、男女で物の見立てに影響を与えているものは異なると考えた。さらに、現実の世界と想像の世界について、高橋(1993)は「想像の世界は、現実の世界についての認識が前提となって発生するもの」と述べており、本研究で示している「仮想の世界」も、現実の世界の上に成り立っていることが分かる。そのため、子どもの物の見立ては、現実の世界での経験がもとになっている可能性が高いといえる。その上で、特に男児は、現実の世界と比べ、仮想の世界のもの・人の方が、魅力的で、面白いと感じているのではないかと考える。

#### 4 今後の課題

観察調査を通しては、見立ての対象となるものも、重要であると感じた。A保育園では、各部屋にブロックがあり、筆者が観察調査を行った日にも、ブロックを様々なものに変身させ、見立てて遊んでいる姿が見られた。このように、子どもが何かをつくりあげ、遊ぶことのできる玩具は、食べ物などの形が決まっている玩具に比べ、イメージが広がりやすいのではないかと考える。子どものイメージを広げる玩具に関しては、今後も研究を続けていきたい。

また、筆者がごっこ遊びに関わる際には、子ども同士の関わりを大切にし、子どものつくりあげる世界観を妨げないよう配慮しながら、物の見立てにはどのようなものが影響しているのかについて、今後も調査していくこととする。

## 大学野球選手におけるハムストリングスの肉離れの要因の検討

318002 阿部大樹

指導教員 奥田鉄人

### 1 研究背景

アスリートにとって肉離れは競技離脱、選手生命に関わるものである。トップアスリートの疫学調査では、肉離れの最も多いスポーツ競技は陸上競技（29.9%）で、2番目にサッカー（12.4%）である。好発部位に着目すると陸上競技はハムストリングスで64%、サッカーが44%といずれもハムストリングスでの発生である。野球においても同様にハムストリングスの肉離れが最多で26.1%となっている。原因には筋力の左右差が大きいことや膝関節屈伸率の低下などが報告されている。野球選手の受傷機転には走行時の着地動作（ベースタッチ）、守備で捕球してから方向転換して送球するときなどが多いとされている。野球選手の等速性膝屈伸筋力を測定しハムストリングスの肉離れとの関連性を検討した研究は見当たらず、本大学硬式野球部でも毎年のようにハムストリングスの肉離れが発生していることから受傷要因の検討をする。

### 2 対象と方法

被験者は本大学硬式野球部員13名とした。13名に対し関節可動域・筋柔軟性（足関節背屈角度・膝伸展位、足関節背屈角度・膝屈曲位、足部底屈角度、下肢伸展挙上テスト、踵臀部間距離、股関節内旋角度）運動能力テスト（片足幅跳び、片足3段跳び、片足垂直跳び）、等速性膝屈伸筋力（膝伸展筋力、膝屈曲筋力）を測定し、その後110日間観察した。

### 3 結果

観察期間の110日間で公式戦16試合、練習試合5試合が行われ、この間でのハムストリングス肉離れ受傷者は16名中2名であった。これらは全体の12.5%という結果となった。測定項目では受傷群は非受傷群に比べて、股関節内旋角度の左右差（前後差）が大きいこと、片足3段跳びが優れていること、300deg/s・伸展の左右差（前後差）、60deg/s・屈曲の左右差（前後差）が大きいという結果を得た。

### 4 考察

股関節内旋角度の左右差は下肢に慢性疾患、特に鼠径部周辺の疾患を多発する一つの原因になりうることに加え、左右差が走行をはじめとした運動中の動的アライメント、股関節回旋コントロールの乱れを生じさせ、ハムストリングス（大腿二頭筋長頭）にストレスを与えていたこと、その状況で運動を続けていたことがハムストリングスの肉離れの発生の要因の一つであると考えられる。運動能力テストでは受傷群は非受傷群に比べて水平方向の力発揮能力が高いが垂直方向の力発揮能力が低いことから、垂直方向への跳躍力の欠如がハムストリングスの肉離れ発生の要因の一つであると考えられる。膝屈伸筋力では受傷群は特に各角速度での膝屈曲筋力の左右差が大きいことが片側の脚を優先的に使うことに繋がり、疲労の蓄積、フォームの乱れを引き起こしたことがハムストリングスの肉離れの発生の要因の一つであると考えられる。また、今回は投球時における前脚と後脚の比較ができなかったため今後検討していく。

### 5 結語

本研究は、金沢星稜大学硬式野球部員13人を対象として①関節可動域・筋柔軟テスト②運動能力テスト③等速性膝屈伸筋力の測定を行い、ハムストリングスの肉離れの受傷要因を検討した。受傷群は非受傷群よりも股関節内旋角度で左右差（前後差）が大きく、ハムストリングスによる股関節伸展がより強調される垂直跳びの能力が低く、膝屈伸筋力では受傷群は特に膝屈曲筋力の左右差が大きかった。本大学硬式野球部はウォーミングアップ、クールダウン、筋力トレーニングは各個人に委ねられているが、今後はチームで股関節内旋をはじめとしたストレッチを左右差なく行うこと、垂直跳びをはじめとした垂直方向の跳躍トレーニングを行うこと、そもそものハムストリングスの筋力（膝屈伸筋力、股関節伸展筋力）トレーニングを左右差なく行うことがハムストリングスの肉離れを予防するうえで必要であると考えられる。

